

---

Berry Merry Christmas..

北咲希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Berry Merry Christmas . .

### 【Zコード】

N3052D

### 【作者名】

北咲希

### 【あらすじ】

「このケーキ、つくれますか」小さなケーキ屋に舞いこんだ依頼は、高級ホテルのクリスマスケーキを模倣しろ、というもの。その依頼を受けたケーキ屋と、そんな無理を申し出た客のほのぼのとしたクリスマス。

からん、ころん。  
カウベルの明るい音とは対照的に、ひどく切羽詰まつた様子で客  
が入ってきた。

「すいませ……ん……！」

ひどく呼吸を乱し、髪がぼさぼさな男だった。右手にきつく紙き  
れを握りしめている。

「これと同じケーキ、作れますか」

クリスマスのことである。

いらっしゃいませ、と言つタイミングを逃した雪は、あいまいな  
笑みを浮かべて客を迎えた。

「同じケーキ……ですか」

「はい」

頷いた男はケーキのたくさん並んだショーケースに近づき、雪の  
目の前に握っていた紙きれを置いた。  
雪はそれを広げ、少し目を見開いた。

「ホテルグランディアーノ……すぐそこにある三ツ星ホテルです  
ね」

男は頷き、雪を食い入るように見つめた。雪は形のよい眉を少し  
ひそめ、困った顔で男を見返した。

「どのケーキですか」

「この グランディアーノ・サン・ノエル・ベリーです」  
長い名前をすらすらと言つた男に少し驚き、また雪はチラシに目を向けた。

一段重ねのスポンジに、溢れんばかりの苺がのつてゐる。  
大きい苺……一つ一百円近くするんじゃないかな。

雪が驚いたのはそれだけではなかつた。白い生クリームがきらきらと光つてゐるのだ。よく見ると金箔がちりばめられていた。断面図には三層のクリームがあり、どれにもびっしりと苺の断面が見える。きめ細かいスポンジはしつとりとおいしそうだった。  
そして雪は価格を見て驚いた。

「一一万！？」

「コキさん、何かあつたんすか」

雪の声に、若い男の声が続いた。ショーケースを兼ねたカウンターの後ろ、厨房の方からコック姿が現れた。低いコック帽の下にツンツンとした茶髪がのぞいている。きつい目付きでコックは男を見た。

「なんすか

「カイくん、お客様よ。……このチラシのケーキ、作つてほしいんですつて」

小柄な雪は海カイと並ぶと余計小さく見える。雪は黄色いかわいいエプロンに、長くまつすぐな黒髪を一つに束ね、愛らしい顔をした娘だった。そんな雪と並ぶとひどく人相が悪く見える海を見て、客である男は小さく身を縮めた。

「お……お願いします」

「は！？……いや、何言つてんすか。んなのムリつすよ。ねえ、コキさん！…小さいケーキ屋だからって、金さえ払えば何でもすると思つてんすよ。バカにするなつての。さあ、とつとと帰つてくれ。うちは小さいけど、ホテルの高級ケーキを真似しなきゃやつてけないほじじやねえつすよ」

口を開いてすぐ、喧嘩腰で海はまくし立てた。雪も男も呆気にと

られて海を見たが、男はかぶりを振ると紙きれに手を伸ばした。

「すいません……失礼なこと言いました」

落胆した男を雪は氣の毒そうに見つめた。

「どうした」

厨房の方から低い声が響く。三人がそちらを見ると、海のものよりもずっと高いコック帽をかぶつた、がつしりとした体型の男が立っていた。

「……お父さん。このお客様がこのチラシのケーキ、作つてほしいって」

雪はカウンターを出た。そして、大柄で「ごつ」コックを見てその迫力に驚き、身動きを止めた男の手からチラシを引き抜いた。「ごつ」コックはそれを受けとり、視線を向けた。店内は甘い匂いに満っているのに、ひどく居心地の悪い時間だつた。「ごつ」コックがなかなか口を開かないでの、男は身を強ばらせ、半ば上田遣いで「ごつ」コックを見上げる。

「……店長……そんなの悩むことないですよ……わざと断つて下さいよ。ホテルの真似しきつておかしいじゃないすか。……どうせ二万も払えないから、安く似たような手に入れようつて魂胆つす。この店バカにするヤツは許せないですよ」

海が沈黙に耐えかねたように言つた。店長と呼ばれた「ごつ」コックは返事をしない。

ショーケースの前で立つ男の横にいた雪は、何かに気づくと自分の父を見た。

「お父さん、作つてあげて」

海と男は驚いて雪を見た。

「ユキさん！？何言つて」

「分かつた」

海の叫びを店長の静かな声が遮った。

「店長！？」

「うるさいぞ、海。雪の言葉が聞こえなかつたか」  
それを聞いて海は頭を抱えた。店長は一見いかつく、暴力団組長にも見えないこともない風貌を持つ。しかし愛娘のこととなると全くの別人に変貌する。いわゆる親バカというものだ。しかも極度の。だが本人はそのような自覚はなく、仮に指摘したとしても否定するだろうから、海はなす術がなかつた。

「いつまでに作ればいいんだ」

憮然とした表情で店長は男を見た。男はところどころ白く汚れてはいるが、結構上品なコート着ていた。けれども風に乱れた髪や情けなく縮こまつた姿は、ひどく滑稽に見えた。

「あ……あの、ありがとうございます……。出来れば今日の

「今日中！？突然やってきてそれかよ！…店長、ムリっすよ

「海。もう一度、はない。静かにしろ。…で、今日のいつだ」  
店長の凄みのある声に、思わず口を挟んだ海は表情を凍らせた。

男は恐縮しきつた様子で答える。

「出来れば……六時までには……」

海はまた口を開こうとしたが、店長をちらりと見やり、力なくうなだれた。

「二時間半か……」

壁にかかった鳩時計の長針が、二時過ぎを指していた。店長はチラシを持ったまま男に背を向けた。

「まずスポンジで一時間だな。その後手伝えよ

その言葉を残し、店長は厨房の奥へと消えて行つた。海の苦々しげな舌打ちが、小さく響いた。

「はい、紅茶です

「ああ……ありがとうございます」

「何でそんなやつ……そんなお客様さんに茶なんか出すんすか、ユキさん……」

広くはない店内の片隅に小さな喫茶スペースがある。三つ置かれたテーブルの一つに男が座つており、そこへ雪がティーポットを持って現れた。テーブルには既に小さなケーキが一つ置かれている。雪はティーポットをテーブルに置くと、自分も男の向かいの椅子に座つた。それを視界にとらえた海はすぐさま飛んでくると、自分も椅子をとつてテーブルを囲んだ。奇妙な正三角形が出来上がる。

「カイくんてば……。お客様はお客様でしょ。あ、失礼ですが、お名前は」

雪がやわらかな笑みを浮かべた。男は懐をさぐり財布を取り出すと、小さな紙片をその中から引き抜いた。

「幸野三太です、サチノサンタ。今年一十三になつて、仕事は外資系に」

「そこまで聞いてねえ……聞いてないつすよ、サチノさん。ねえ、ユキさん」

海は男 こと、三太の言葉を遮り、雪に笑顔を向ける。三太は海の態度の変わりように驚きながらも、微笑ましいな、とでもいうような優しい笑みを浮かべていた。

「サンタさん……いい名前ですね。プレゼント欲しいわ」

雪は海の言葉を気にも留めず、嬉しそうに名刺を見つめている。その様子を見た海は面白くなさそうに膝を組み、椅子にふんぞり返る。そこではたと思いだしたように三太を指差した。

「ユキさん、だいたい何でこんなヤツ……サチノさんの依頼受けたんすか。そりや爽やか系かも知れないけど特にかつこいってわけじゃないし……なんか損した気分つすよ」

「いいえ。カイくん。だつてサンタさんはあのケーキちゃんと買ってらつしゃつたもの。ですよね？それで……どこかでダメにしち

やつたんでしょ」

雪はにつこりとほほ笑んだ。海は一瞬それに見とれながらも、心中では、名前で呼ぶなあ！！と悲痛な悲鳴を上げていた。けれどもそれには一向に気づかない様子で、雪はエプロンのポケットに名刺をしまう。

「な……何でわかつたんですか。確かに僕、買つたんです。今朝早くから並んで、ちゃんと……。だけど急いで家に帰らうとしていたら、人にぶつかって。箱が……」

悲しそうに視線を伏せる三太。それでも海は可哀想だなんて思いもしなかつた。いい気味だ、とでも言いたげな表情をしたが、雪が三太に同情するのでそれを大袈裟に表わすことはしなかつた。

「まずそのコート。せっかく上質なものなのに白くしちやつて……生クリームでしょ。私もよくやつちやうんです。それでもだいぶ拭き取つたのかも知れなけれど、ズボンの裾にもはねてますよ」雪は小さく笑つてテーブルの下の足を見た。確かに黒のストライプスーツの裾に白い塊がいくつか付着している。

「さすがユキさんすね。けど、どうしてぶつ飛んだもので服汚れるんすか」

海は細く鋭い眉を少しひそめる。だが心配しているわけでも、本当にその質問の回答が気になつてているわけでもなかつた。雪の洞察力に感心しながらも、そんな細部までこの男のことを見ていたことにわずかながらも嫉妬していたのである。

「いや、その……慌てて箱拾いあげたんですよ。そしたらぼろぼろ……と中から出てきて。道路に苺は散らばるし、服は生クリムまみれだし、散々でした。でもそんなことはいいんです。僕はどうしてもあのケーキ持つて帰らなきやいけなかつたのに」

三太は大きくため息をついた。そして腕時計をちらりと見やる。乱れた髪を整え、少し落ち着いた様子の三太は十分魅力的な青年だつた。温和そうな顔に、よい身なり。誠実そうな人柄。海は激しく気に食わなかつた。何より気に食わないのが、自分の目の前で向き

合つ一人はなかなかお似合いなのである。

「誰かにプレゼントされるつもりだったんですか」

雪が首を少し傾けて聞く。三太は力なく頷いた。

「クララ　あ、僕の彼女なんですけど、今日一緒に食べようと思つてたんです。どうしても食べたい、つて。あれじゃなきゃいやだつて言つてきかなくつて。限定五十個だから必死に買いに行つたのに、駄目にしちゃいました」

「クララ……かわいい名前ですね。いいなあ、そうやつて頑張つてくれる人」

雪が自分の紅茶をすすりながら、目を細めた。海はというと一層眉をひそめる。すでに深いしわが眉間に一本、縦にはしつっていた。

「よくそんなワガママな彼女の言つこときくんすね。あんなバカ高いホテルのなんかより、うちのケーキの方がずっとおいしつすよ。なんてつたつて元フランス一流ホテルのパーティショ、柊創ヒラギシクルが腕をかけてるんすから」

白慢げに言う海に対して雪はちょっと眉をひそめた。

「そんな言い方つてないでしょ、カイくん。あそここのケーキもおいしいわよ。それにお父さんの経歴話すのダメつて言つたじゃない。お父さんは肩書きなしにこの”Berry wishes”で頑張つていこうつて決めてるんだから」

三太は今更ながらにこの店の名を知った。そして目の前にある小ぶりだが、とてもおいしそうなショートケーキにフォークを伸ばす。一口食べて、驚いたように目をみはつた。

「とつても……おいしいです。うわ、びっくりしたなあ。僕本當はあまり甘いものとか好きじゃないんですけど……でもこの味すごい好きです。クララも喜んでくれるかな。ああ、そうだ、カイくん。クララは我がまま。それは確かだけど、それつて僕のせいなんだよ

俺の名も呼ぶな！」

心の中で叫びながらも、三太がケーキを認めたことは嬉しかった。

その飾り付けは俺がしたんだぞ、と言いかけて雪に白黒するのことを咎められるのを恐れ、口をつぐんだ。

「サンタさんの？」

雪が尋ねる。その顔はすぐ嬉しそうだった。ケーキをほめられたのがとても嬉しいんだろう、と海は考えた。そう頭では分かっているのに、雪が自分以外の男に笑いかけるのは激しい苛立ちをもたらした。

「はい。僕、企業に勤めてるって言いましたよね。そこ給料はそんないいわけじゃないんですけど、すぐやりがいを感じられる場所なんです。本当に自分が好きで選んだ職場だから働くことが嬉しい……僕にとって、仕事って一番なんです。クララのことも好きなんんですけど、それでも仕事が絡むと没頭しちゃって、ついほつといてしまうんです」

三太は形のよい眉じりを下げ、悲しそうに言つた。

「でもクララはそんな僕のことを責めたりしないんです。だけどこの間、デートすっぽかして……あの日、ちょうど重大な仕事が入つて、どうしてもその日のうちに終わらせたくて。気づいて慌てたときには日付が変わつてました。なのにクララ、待ち合わせ場所で待つてたんです。それで驚いたんですけど、嬉しくて駆け寄つたら思いきり平手打ちされました。で、あのケーキを買ってこい、と」

海は目の前の男をまじまじと見つめた。へらへらとした奴で、とても真面目に仕事し続けるようには思えなかつた。少なくとも海の目では。

「しかし、そのクララって女、名前も変すけど、よくそんな待つてたつすね。しかもそれで別れないってサチノさん、その外人なんかすごいことでもしてるんすか」

「外国人？違うよ、カイくん。クララは日本人。名前も漢字で

」

三太は懐からペンを取り出すと、テーブルにあつたナフキンにさらさらと字を書いた。

久樂々。

確かに、漢字である。

「うへ、すごい珍しい名前つすね。つていうかその話だつたらク  
ワラさん、別にワガママじやないつすよね」

「素敵な名前ね」

海の疑問をよそに雪はナップキンに描かれた流麗な字に見入つてい  
る。いや、名前を見ているのだろうが、三太の字はそれだけでも価  
値ありそうな整つた字だつた。

「うん。それは僕が悪いし、だからケーキ買いに行つたんです。  
それじゃなくて……なんていうかな、僕も原因は分かつてんだけ  
ど、クララは高価なものを欲しがるんですよ。宝石やバッグ、家具、  
色々とね」

雪と海は驚いたよつて三太を見る。待ち合わせ場所でずつと健氣  
に待つている女性とは、とてもつながりが見えなかつた。あまりの  
イメージの変わりよつて二人とも顔を見合させ、首を傾げる。それ  
を見て三太はあいまいに微笑んだ。

「クララ、それを買つてやつても使うわけじやないんですよ。ず  
つとつておいてあるんです。最初は無駄だな、つて思つてたんで  
すけど……。付き合い始めの頃はそんなことなかつたんです。些細  
なことやものでもすぐ喜んでくれて、だけど僕の仕事が忙しくな  
つてからそんな風に。趣味が変わつたのかな、つて思つたこともあ  
つたんですけど」

三太はさびしげな微笑を浮かべ、雪と海の顔を見た。

「そうじやないみたいなんです。最近は外食もフランス料理の一  
番高いフルコースとか行くんです。だけどクララ、ちつとも嬉しそ  
うじやないんです。自分で行きたがつたのに、いかにもおいしくな  
い、つて顔で必死に料理ほおばるんですよ。おいしくないの、つ  
て聞いたら首振るんですけどね。でもそのあとに喫茶店でデザート  
食べない、つて聞いたら  
「どうしても食べたいなら……付き合つてあげてもいいわよ。」

「つて。いざ行ってみたら、フランス料理よりよっぽどおいしいにパフェ食べるんです。それで無理してるのかな、つて」

三太が一度口を開じると、雪と海はそれぞれ考えにふけった。久樂々は一体何を考え、そんな行動をとるのか。けれどいくら考えても一人ともその答えは見つからなかつた。無言でじつと考え込む二人を見て、三太は苦笑しながら口を開いた。

「そんなに難しいことじゃなかつたんです。クララも以前、一度僕を責めたことがあるんです。仕事ばかりじゃなくて私のことも考えてよ、つて。そんなにお金や仕事が大事なの、つて聞かれました。でも僕お金に特別興味があるわけじゃないんですよ。だからそんなに欲しいわけじゃない。将来家を建てられるぐらいには欲しいけど、つて答えました。そうするとクララはちょっと笑つて、じゃあ今はそんなに困らないわね、つて。そう言つた直後ぐらいから少しづつ高いもの買うようになつたんです」

長くしゃべつたあと、三太は紅茶を飲んだ。ほどよい甘さに心地よい温かさ。普段はコーヒー や緑茶を好む三太にとって、嬉しい驚きだつた。

そんな発見に喜ぶ三太に対し、雪と海は難しい顔をしていた。

「つまり……」

海が口を開いた。

「クララさん、サチノさんにかまつて欲しかつただけなんですね。何をしてもかまつてくれないならせめて、働いて貯めた金使ってやる、つて感じで。でもそれって金なくなつたサチノさんが余計仕事しちゃうだけなんぢやないすかね」

「そうだね。僕もそう考えたんです。でもクララ、なんだかぎりぎりの線読んでるみたいなんですよ。僕も幸い今はそれなりに稼げてる方なので……まあ毎日精一杯、彼女放つて仕事してればこそなんですけどね」

「クララさん、素敵。サンタさん、もつと大切にしてあげなきゃダメですよ。でもクララさんのお願い聞いてケーキ買いに行くなんて、彼女もきっと喜びます」

「でもケーキなら他にも高いやついくらでもあるじゃないつすか。なんでわざわざあのケーキなんすか」

嬉しそうに微笑む雪とは逆に、海は機嫌悪そうにぼやいた。三太はそんな海を見てちょっと微笑んだ。

「うん……ああ、その待ち合わせほつたらかしにしたせいで、ケーキを買つことになつたんですけどね。あのケーキ買つてこなきや別れる、って言われまして。いや、それまでに別れ話は僕から何度も切り出してたんです」

「はい！？」

雪と海は同時にまじまじと三太を見た。こともなげに言つた本人はあまり自覚していないようだが、彼の言葉は一人に衝撃を与えた。

「何度も別れ話、つて……何でつすか。あんたの方がいろいろしてもらつてんのに」

「だからなんですよ。だから、いつも大切にしてやつてない自分が情けなくて、もつといい人が他にいるよ、つて言つたんです。でもクララはいつも首を横に振るばかりで。彼女の友達にも別れてくれ、つて何度も言われてるんです。可哀想だ、つて。でも……。それで今回、彼女の方からそう言われて、本当は別れた方がいいんでしょうけど、いざクララから言われるとなんだか辛くて」

情けないです、と言つて三太は表情を暗くした。

海は初めて目の前の男が哀れに思えた。なんて不器用な奴だろう、と。けれどほんの少し同情してやつても、たとえ彼女がいたとしても、雪になれなれしくするのは許せなかつた。少しだけ態度を軟化させ、椅子に座りなおすと海は言つた。

「でもつまり、あんた別れたくないんすよね。だつたら頑張るしかないつすよ。それにうちの店長が作るケーキ食べて、クララさんが納得しないわけないつす。あんた、クララさんと結婚したいんで

三太はぽかん、と口を開けて海を見た。そしてしばらくしたあと、少し頬を赤らめた。

「結婚……したいんでしょうかね、僕。よく分からないんです。クララを幸せにしてあげられる自信がないんです。でもクララがいなくなるのはさびしい。そうは言つても辛い思いはさせたくない。仕事に没頭してしまるのは本当に申し訳ないけど、いつも無我夢中になつて……」

困つたように言つ三太に、雪が声をかけた。

「サンタさん、大丈夫ですよ。クララさんもそれはきっと分かってます。だから責めたりしないんです。だからこそケーキ一つで許してくれるんですよ。クララさんもきっと結婚、望んでます。……あ、せつかくのクリスマスなんだから、指輪でもプレゼントしたらどうですか。サンタさんからのプレゼント、きっと喜びます」

雪の言葉に三太は驚く。その口が小さく、ゆびわ」と動く。おもむろに財布を取り出し、中身をちらと確認する。そして大きく嘆息した。

「三万円……クララにあげられるような指輪、買えそうにあります。それによりによつてこんな日にカードも忘れてしまつたみたいですし。だいたい、迷惑だなんて思われたら嫌ですし、最近のクララの趣味もよく分かりませんし」

「指輪もらつて喜ばない子はないですよ。私だって嬉しいです」  
雪が少しほにかんだ笑みを浮かべた。それを見た海は口の中で小さく舌打ちをした。

海の財布には十人の諭吉がいた。それはけして彼が金持ちだから、という理由ではない。今日、偶然に持つていたのである。全くもつて、誰かにプレゼントを買うためではない、と彼は心の中で何度も繰り返した。そして目的もない金なのだから、目の前の哀れな男に貸してやる、と思つ。だがその一方で、雪の恥ずかしそうな笑

みがちらつき、つい自分が”プレゼント”したくなる衝動にもかられた。けれども結局、彼の理性が勝利した。

「貸してやりますよ。倍返しつすから」

海はポケットからブランド物の財布を取り出すと、乱暴に札を引き抜き、テーブルに叩きつけるように置いた。三太と雪はそれを目を白黒させながら見る。そっぽを向いた三太をちらりと見てから、雪は一万円が十枚もあるのに気付き驚いた。

「カイくん、十万円も……持つてたの？」

「何か買うつもりじゃなかつたんですか」

三太の質問に海は囁みつくように答えた。

「そんなんじゃねえ……ないつすよ。別に誰もプレゼント買うなんて言つてないつす。俺、あげる相手なんてそんな、いるわけじゃないし。だからあんたに貸すつて言つてんすよ。男だつたらしつかり決めろつての。道路挟んだ向かいにちょうど宝石店あるから、今から買つてくれればいいじゃないつすか」

投げやりな言い方にこもるものに気付いた三太は、目を細めて海のコック帽をかぶつた後頭部を見た。そして嬉しそうに微笑む。

「……ありがとうございます。倍、とはいきませんけど必ず返します。ああ、そうだ。ユキさん、一緒に見に行つてもらえますか。どんな指輪を女性が好むのか分からなくて……」

「え？」

十万を大事に財布にしまつた三太は、雪に問い合わせた。戸惑いながらも三太と久楽々の助けになるなら、と雪は頷きかけた。もちろん、それを黙つて見過ごすわけにはいかなかつたのは海である。

「ちよつと待て！！俺が行く」

「カイくんが？サンタさんと指輪見に？」

雪が大きな目をさらに見開いて、勢いよく立ちあがつた海を見上げた。海はかぶつていたコック帽を椅子に置くと、三太のコートを

引っ張った。

「そうつす。」いつ見ても俺、センスありますからね。ユキさんはいつも俺のデコレーションの腕見てるでしょ。もつすぐスポンジ出来るはずだから店長手伝つてやって下さい。」いつこのつのはやっぱり指輪見なれた奴が行くべきつすから」

口早に告げる海に雪は首を傾げた。

「指輪、見なれてるの？」

海はそう尋ねられ、思いきり赤面した。そしてそれを隠すように背を向けて扉を開く。カウベルが楽しそうに、からん、ころん、と響いた。

「そういうわけじゃないつすけど、とにかく行つてきます。店任せました。あんた、ほら行くぞ」

三太はずりすりと海に引きずられていく。だが彼が浮かべた表情はけして不快そうなものではなく、むしろ嬉しそうに微笑んでいた。

一人を不審そうに見送ったあと、雪は厨房に足を運んだ。父親はちょうど焼きあがったスポンジをオープンから取り出しているところだった。

「ああ、ごめんね、お父さん。手伝つわ」

「ああ。……話は聞いていた。なかなか大変そうだな、あの一人」父親はふんわりと焼けたスポンジを置くと、冷蔵庫から苺を取り出した。

「生クリーム泡立ててくれ」

「わかつたわ。でも、一人……？サンタさんと……カイくん？力イくんも大変なの？」

その質問に店長である父親は答えなかつた。不思議に思いながらも雪はボールに生クリームをそそぎ、ほどよく砂糖を混ぜて泡立て始める。その音で雪に声が届かなくなつた頃、父親は小さく呟いた。

「大変だうと、まだ嫁にはやらん」

「いらっしゃいませ」

そう迎えられて、ひどく自分達が場違いだと海は気づいた。クリスマスともあって高級そうな宝石店の店内は、カップルばかりである。それなのに自分の横にたつのは男、そして自分も男であり、しかも服装はパーティシエのそれのままだ。明らかに不審な二人ににこやかな笑みを浮かべた店員たちが、少し固まつた気がした。

けれどもそんな空気に気づかないのか、三太は颯爽とショーケースに近づくと物色するように指輪を眺め始めた。海は嫌々ながらも、その傍へ寄る。

店員が笑顔をこわばらせながらも話しかけてきた。

「何かお探しでしようか

「指輪です」

三太はそう言いながらも視線はショーケースから外さない。その器用さに半ばあきれながらも、自分も少し見てみようかと海がケースに近づいた時だった。

「『結婚なさるんですか』

バカ、何言つてゐる。と他の店員が小さな声で叱咤するのは遅すぎた。

「やけんじやねえ！なんで俺がこんな野郎と結婚しなきゃなんねえんだ！！

海が憤慨し、激しく怒声を浴びせた。フロア中の客が驚いて振り返る。そしてびくびくと視線をそらした。三太はそんな海の袖を引つ張つて、落ち着こうよ、と言つ。

「冗談に決まってるじやないですか、カイくん。そんな風に怒鳴つちや駄目ですよ。」めんなさい

やわらかな物腰で三太は店員に頭を下げた。それを見た店員は頬を赤らめながら首を振る。それを見た三太は、またケースに視線を戻した。

「被害者は二ひぢだつつーの」

海はぼやくように言った。しばらく指輪に見入っていた三太だつたが、ふと視線を上げ、海を見た。

「やっぱりカイくんはコキさんの前と、そうでないのでは全然態度が違うんですね。失礼かも知れませんが、どういうご関係か聞いてもいいですか？」

誰が、とはねつけようと思つた海だつたが、なんとなく口を開いた。別にこいつに話してやりたくなつたわけじゃない、と海は自分に言い聞かせた。話してやりたいわけじゃないが、よく分からないその場の雰囲気が自分の口を開かせるんだ、と思つた。

「俺、別に柊家の一員でも何でもねえんだよ。……一年前のちょうどクリスマスの頃。親離婚して、色々うまくいかなくて俺だいぶキレててさ。何度も警察に捕まるようなことやつたし、完全に不良つてやつだつた。それから遊びだけど付き合つてた女に振られて、完全頭きて人ぶん殴りまくつたんだ。暴行加えた、つてやつで。けどどんだけ殴つても気晴れねえし、逆に苛々して……そんなときに”Berry wishes”にふらつと立ち寄つた。理由なんてなかつた。ただ、なんとなく。ケーキとか甘いもんなんて気持ち悪いと思つていたのに、だ。それで入ると笑顔で迎えてくれたのが……コキさんだつた」

海はショーケースに両手をつくと、小さく息をついた。三太は彼をじつと見守つている。そして、店員もいつの間にか聞き入つていた。

「去年の俺は今じゃ信じらんねえくらい荒れてて、伸ばしつぱなしの金髪に、ピアスじゃらじやら開けて、だらしない学ラン着てさあ、俺高校一年ダブつてる十九歳ね。眉もずっと薄くて、煙草

くさくて最低な感じだつたるうに、ユキさんは笑顔だつた。いらっしゃいませ、ご注文は。つて聞かれたけど、面倒で答えずに椅子に座つた。明らかに迷惑な客なのにユキさんは笑つて……あんたにしたみたいに、紅茶とケーキ出してくれたんだ。いらねえ、つて言う俺に、一口でいいから、つて。結構タイプな女だと思つたし、なんとかわかななかつたけど苛立ちがいつの間にか消えてたんで、本当に一口だけ食べた。自分でも信じられなかつたけど、めちゃくちゃうまかつた。気付いたら全部食つて……。で、はずいけど、泣いてた。わけわからんねえけど泣いてた。それをユキさんは笑顔で見てた

海はちらりと三太を見ると、口の端を釣り上げるだけの笑みを見せた。

「家出なんてしょっちゅうで、しかも親が離婚してごたごたしてたのをいいことに俺は本当に家を出た。それでの店に居候。これが俺とユキさんの関係。……納得かよ」

吐き捨てるように終えた海に、店員が拍手を送る。

「なんでてめえが聞いてんだ！！」

海は思わず怒鳴ると、店員はびくりと一步後ずさつた。

「カイくん、せつかくいい話したあとなんですから、そんな風に怒鳴っちゃ駄目ですよ。彼女怯えてるじゃないですか。それより、いい話ついでにもう一つ聞きたいんですけど」

三太がにこりと笑む。海は激しく眉をひそめた。

「カイくんだったら、どの指輪をユキさんに買います？」

「ふつざけんな！！だから、誰がユキさんとけ……結婚なんて、まだ第一付き合つてすら……じゃなくて、なんでてめえにんなこと言わなきやなんねえんだ！！」

店中の人間が海を一斉に見る。激しい剣幕で怒鳴る海を猛獸でも

見るような視線で追つたあと、再びびくびくと一様に見なかつたふりをした。

「カイくん、落ち着いてくださいって。だいたいカイくんが指輪選び手伝ってくれる、って言つたんじやないですか。それなら意見聞くのも当然でしょう？」

三太が言つと、海は痛いところをつかれた、というように顔をしかめた。そして無言でショーケースを見渡すと、即座に一つの指輪を指した。

小さなダイヤが花を形作つており、小ぶりな、けれどもかわいらしい指輪だつた。三太はそれを見てやわらかく微笑む。せつしき食べたケーキみたいだな、とも思った。

「かわいらしいですね。ユキさんによく似合いそうです」

「だからなんでてめえはユキさんと繋げるんだ。俺なりに選んだけなんだから、いちいちそうやつて繋げてんじやねえ。てめえも気に入るならそれをさつさとクララに買えばいいじゃねえか」

ぎりりと三太を睨むと、海はそっぽを向いた。くすり、と笑いながら三太は言つた。

「いいえ。これだけは買わないことにします」

海は振り返ると、喧嘩売つてんのか、と三太の胸倉を掴んだ。お客様……と弱気な店員の声が響く。

「だつてその指輪、あなたがいつかユキさんに買うべきものでしょう。クララに買うものとかぶるの嫌だつたんです。お互い、大切な彼女にはたつた一つのものあげたいでしよう」

余裕ぶつた笑みは最初に見た三太のものとは大違いで、海は呆気にとられた。自然と手から力が抜けていく。

「てめえもだいぶ二重人格だな」

「いいえ。かなり気が動転していただけです」

そう言つと、三太は再びケースに目を戻した。そしてしばらくすると、一つの指輪を選んだ。

「これに決めます」

そう言つて三太が指さしたのは、銀の輪に螺旋状にダイヤがはめこまれたものだつた。

「十一万八千円です」

店員はそう言いながらケースから指輪を取り出す。

「花のもかわいいじゃねえか」

面白くなさそうに咳く海に、三太は言つた。

「そうですけど……値札見ました？」

言われて海は先ほど自分が選んだ指輪を見た。00000。五つの丸。……先ほど見たときよりゼロが一個増えていないか……海は目をこすつてもう一度値札を見たが、やはりそれは三十万だつた。だまりこんだ海を横目に見ながら、三太は小さく微笑んだ。

「いつか、買つてあげて下さい。絶対に喜びますよ」

「言われなくとも」

海の小さな咳きは、三太の耳には届かなかつた。

からん、ころん。

カウベルが響いたのを耳にして、雪はカウンターから出でてきた。

「お帰りなさい。買えましたか」

「はい」

嬉しそうに笑う三太を見て、雪も笑みを返した。なんとなく照れくさい海は、椅子に置いたコック帽をかぶると厨房に入つて行つた。不思議そうにその背中を雪が見送る。

けれど海はすぐ戻つてきた。

「おい……じゃなかつた。あんた、指輪ちょっと貸してくれないつすか」

海の美貌に忍び笑いを噛み殺しながら、三太は指輪の入った箱を海に手渡した。何の考えも持たずに渡してしまったが、海は何を思つたか指輪を中から取り出すと、それだけ持つて厨房に戻つて行く。

「ちょっと

慌てた三太は一步厨房に近寄つた。

「海。だからお前はどうしてそりやつて俺のケーキに細工するんだ」

「まあまあ。面白いからいいじゃないつすか」

中から不思議な会話が聞こえる。雪と三太が中に入ると、スポンジを重ね、生クリームを塗る作業をする店長を海が”邪魔”していた。気づけば彼が持つて行つたはずの指輪はない。

「海くん、指輪」

三太の声に海はにやつと笑つて、ケーキを指差した。

「こん中つすよ

「え！？カイくん何してんのよ。サンタさん困つちやうじやない。せつかくの指輪を」

雪が言つと、海は小さく笑つた。

「たまにはこういうベタなのもいいかな、つて思つたんすよ。どうせそいつはクララ……さんに指輪渡すときにつめらうに決まるじゃないすか。だつたらケーキ食べたら入つてた！…つて方がよっぽど感動的つす」

海の言葉に三太は苦笑した。雪はため息をつき、店長は黙々と作業を進める。あとはデコレーションだけであるようだつた。

「海、プレート書いてくれ」

「はい……なんて書くんすか」

「……ベリーメリークリスマス、だ」

厨房の奥のやり取りを聞きながら、雪と三太はまたテーブルの所にいた。

「カイくん、本当に手先が器用なんですよ。別に今までなにかやつてたつてわけじゃないし、この店手伝ってくれるようになつてまだ一年なのに……私が、だいぶ追い越されちゃいました」

少し口を尖らせる雪に三太は笑つた。そしてふと窓辺の写真たてに目を向けた。店長らしき男性と雪、そして綺麗な女性が一人写つていた。

「失礼ですが、お母様は」

「亡くなつたんです、五年前に。……この店、本当はお母さんがすくなくほんでいたものなんです。でも完成を待たずにお逝りてしまつて。私当時十五歳で、どうしていいか分からなくて……でもお父さんはホテルの仕事やめて、お母さんの気持ちを継ぐためにこの店を守つてるんです」

強い表情を浮かべる雪をまぶしそうに見た三太は、小さくかぶりを振つた。

「『めんなさい、悲しい』と思ふ出でました」

雪は優しく微笑んだ。

「いいえ。もう大丈夫です。それに……この店にいたらいつでもお母さんが見守つてくれよつに感じるんです。なんてつたつて”Berry wishes”だし」雪の言葉に三太が首を傾げた。

「その名前つて……？」

「ああ。お母さんの名前、実果つていうんです。それで実果は果実、果実はベリー……つていう単純な。”願い”は父がつけたものですか」

「笑うとこるじやないだら」

雪が楽しそうに笑つていると、厨房から店長が現れた。その後ろには海が立つていた。

「お客さん、完成しましたよ。これでいいですか」

そう言いながら店長は大きな白い箱を三太の前に置いた。そつと開くと、ホテルのものほとんどそのままの しかしどこか暖かみを感じるケーキがあつた。三太はそれを見ると、すぐに立ち上がり店長の手を固く握つて言った。

「すごい無理を言ったのに……本当にありがとうございました。こんな素晴らしいケーキを見たのは初めてです。実物を見た僕だから言いますけど、僕は向こうのケーキよりもこちらの方がずっとおいしいと思います」

鳩時計が六時を告げる。時間ちょうどだった。

「礼は雪に言え。雪がいなかつたらこんな仕事引き受けなかつた」

庭園をもう違うと、厨房の方へ姿を消した。

「包装しますね」

雪は箱を開けると、大事そうにカウンターの裏へ持つて行つた。その背中を三太と海は見送ると、椅子に腰を下ろした。嬉しそうにしている三太を見て、海はコック帽をテーブルに置くと偉そうに言った。

「感謝しろよ、本当に。あくまでもやらねえとぶつ飛ばす」

「感謝しろよ、本当に。あんたのために仕事一日潰したんだから。うまくやらねえとぶつ飛ばす」

視線は合わさず、早口で言つた海が、三太は嬉しかつた。けれど、どうしてもからかいたくなつてしまい、海に顔を寄せると小声で囁いた。

「カイくん。もっと素直に生きないと、コキさん逃げちゃいますよ」

言つた途端に顔を赤らめて振り返り、海は怒鳴りかけた。

「ふつやかんなよ……てめえに言われる筋合こよ……」

言いかけて、海は動きを止める。

そしておそるおそるカウンターの方を見る。雪が笑顔で海を見て

いた。どこか凄味のある、真顔よりもよほど怖いものだつた。

「カイくん……サンタさんはお客様よ。仲いいのは悪くないけれど、もっと落ち着いてね」

「はい……」

海は力なくうなだれた。それを氣の毒に思いながらも、三太は小声で海に話しかけた。

「ユキさん、カイくんの言葉づかいには驚かないんですね」

海は機嫌悪そうに頷き、腕を組んで答えた。

「当然ですよ。あの頃荒れまくつてた俺を更正させたのは、ユキさんつすから」

呟くような言葉に、三太は小さく頷いた。

「はい。サンタさん、おまちどおさま」

雪が綺麗に包装された箱を紙袋に入れ、三太に手渡した。白い箱に淡いピンクと黄緑のリボンがかかつており、金色のシールが”Merry Christmas”の字を輝かせていた。それを見た三太は嬉しそうに笑つて、一つお辞儀をした。

「本当にありがとうございました、ユキさん、カイくん。おかげで助かりました。僕、頑張ります……絶対にクララを逃したりはしませんから」

決意を新たに表情を引き締めた三太はかつこよかつた。海は嫉妬をおぼえながら立ち上がり、三太の背を押して扉の方へと連れていく。そのあとを雪が追いかける。

からん、ころん。

カウベルがやわらかに鳴る。道に向かつて大きく開けた扉を三太は一步くぐり、雪と海を振りかえつた。手には大事そうに紙袋を提げ、深々と頭を下げた。

「ありがとうございました。では、急いで帰ります」

「今度は誰かにぶつかっちゃダメですよ」

雪がほほ笑んだ。三太は恥ずかしそうに頷く。

「決めてこいよ、バカ野郎。……もう一度と来るなって感じます。もし来てもなぐさめてなんかやらないですよ」

海が三太を一警して言った。三太は深く頷いた。

「はい。カイくんも頑張つて下さいね。あの誓い、果たして下さい、きっと」

ふん、と鼻を鳴らすと海は店内へと戻つて行く。慌てる雪と、海の背を見て三太はやわらかく笑つた。

「では、失礼します。コキさん、メリークリスマス」

「あ、サンタさん。メリークリスマス。頑張つて下さいね」三太は一つ頷くと、粉雪がちらつきはじめた道を歩いていく。少し肌寒い風に吹かれ、戸口で見送つていた雪も店へと戻つた。

カウベルが一つ、からん、ころん。

「やべー！」

雪が店内に戻つたとき、海が何か紙切れを手にして叫んだ。雪が近づいてその紙を見ると、三太が残していったあのケーキのチラシだつた。

「どうしたの、カイくん」

不安そうに海を見上げると、雪はもう一度チラシをのぞきこんだ。何か失敗したのだろうか、と思つ。でもあのケーキの見た目は完璧だつたはずだ。

「こー」……

海の震える指先が指したのは、ケーキに乗つたチョコのプレートだつた。

「プレート？」

「はい……これ、”Very Merry Christmas”

・・・つて書いてあるじゃないですか」

雪はチラシをよく見て、確かに茶色のプレートに白の流麗な英語でそう書かれてあるのを確認する。

「そうね。でもカイくんの英語、いつも通り綺麗だつたし、何の問題もなかつたと思うけど」

「違うんす……やべえ、俺ミスつちまつたつす。」「」“Very”でドットは三つなのこ……。俺いつも店名書くくせのせいで”B erry”って書いちゃつたんすよ。ドットも一つ足りなかつたしつわあ、クララさんにすぐばれるじやないっすか

海は頭を抱えた。テーブルに手をつき、落ち込んだ様子を見せる海の肩を叩き、雪は優しく声をかけた。

「大丈夫よ、カイくん。そんなに細かくは見ないわ、きっと。それに私……たぶんそれがなくともクララさんは気づいていたと思うの」

「何でっすか。あんな完璧なのを店長は作ったのに」

すぐさま切り返す海に笑いかけ、雪はくるりと背を向けた。そしてそのまま口を開く。

「女の勘、つてやつよね」

海は間抜けた表情をしたあと、小さく笑った。

そして、本当に本当に少しだけれど、三太が幸せになればいい、と思った。

からん、ころん。

カウベルが明るい音をたてる。

「いらっしゃいま サンタさん！」

カウンターに立っていた雪は、扉から入ってきた客を見て嬉しそうに声を上げた。その声を聞きつけたのか、厨房から不機嫌そうな顔をした海が現れる。

あれからまだ一ヶ月しか経つてないじゃないか。あつさり振られやがつて。

小さく舌打ちしながらカウンターに顔を出した海は、驚きに目をみはった。雪も口を押さえ、小さく息を呑む。

三太の後ろに小柄な女性が一人、寄り添うように立っていた。

「お久しぶりです、ユキさん、カイくん」

幸せそうにほほ笑む三太を見て、雪は不意に自分の涙腺がゆるむのを感じた。あの日はたった一日の出来事だったが、三太には深く同情し、あれから彼の恋の成就を祈り続けていた。

「なんだよ、あんたもう帰つてきやがつて」

海は不満げに言いながらもカウンターから出で、三太と女性の前に立つた。その後ろを雪がついていき、同じように対面する。三太の後ろに立つ女性は栗色の巻き毛に、派手めなメイクをしていた。けれどきつい印象は受けず、ある雑誌の読者モデルに似ているな、と海は思つた。

「それはごめんよ、カイくん。でも今日はどうしても頼みたいことがあるまして」

そう言つと三太は隣に立つた女性を見やり、少しほほ笑んだ。そこで雪は一步踏み出すると、その女性に手を差し伸べた。

「初めてまして。柊雪です」

その言葉に女性はすらりとした腕を差し出し、雪の手をとつて握手した。

「初めてまして。田井 ウスイ 違つたわ。幸野久楽々です」

照れたようにほほ笑む女性 クララは、とても幸せそうだった。雪はついにぽろぽろと泣き出した。

「良かつたですね、サンタさん」

久楽々は雪の頭を一、二度優しく叩くと、海にも握手を求めた。

「初めてまして」

「……どうも。那戸海つす」

不機嫌そうに三太を見やりながら言つと、久楽々は赤い紅をひいた唇を、にやりと歪めた。

「あなたがカイくんね。サンタによく聞きました。その節は

夫がお世話になりました。でも一つだけあなたに文句があるんです  
少し頬を膨らませ、眉をひそめて久楽々が言つ。初対面なのに一  
体なんなんだ、と海が怪訝そうに相手を見ると、久楽々は左手を海  
の目の前に掲げた。その薬指にはきらきらと、あの日三太が選んだ  
指輪がきらめいていた。

「ああ、それっすか。それがちゃんとクララさんのもとに届いた  
のは俺のおかげだと思うんすけど。何で「うらまれなきやいけないん  
すか」

「あなたがケーキに入ってくれちゃつたせいで、私思いつきり囁  
んじやつたのよ。おかげでダイヤが少し欠けちゃつたの」

「はい！？」

海は大きく目を見開く。

ダイヤが欠けた、つて……。それ悪いの俺じゃなくて、明らかに硬過ぎるあなたの歯なんじや……。

言いかけて、三太の目が笑つていないので氣付いてやめた。彼も  
その光景を目の当たりにして、恐ろしい思いをしたのだろうか。け  
れど、何も言つな、とその視線が海に訴えかけていた。

「す……すんません」

やつと声を振り絞ると、久楽々は小さく笑つた。

「まあ、いいわよ。それより今日のお願いっていうのはね

「ウエディングケーキ、お願いしたいんです」

久楽々の言葉を三太が継ぐ。

雪と海は同時に顔を見合わせ、驚いたように目の前の一人を見た。

「私、あのケーキがホテルのものじゃないってことはすぐ分かつたのよ。でも本当にそつくりで、それを用意してくれたサンタの気持ちが嬉しくて。しかもあの日本当は大事な会議があつたのに、それをそつちの内で頑張つてくれたと思ったたら、全部許せちゃつて。あれから一ヶ月だけ、ずっと一緒にいたいな、って思つたの」

頬を赤らめ、少し視線を伏せて久楽々が言つた。

「それでウエディングケーキはぜひ、ここにお願いしたいなって

思つて」

三太が幸せそうな笑みを浮かべる。

「でも……そんな大きなもの、お父さん作れるかしら」

心配そうに雪は厨房の方を見やつた。そんな彼女に久楽々が優しく語り。

「いいのよ、大きくなくとも。私、もうお金がかかったものはいらないの。サンタが私を見ていてくれるなら、本当はお金なんていらなかつたわ、ずっと。だからケーキは本当に素敵なものなら、どれほど小さくても構わないの」

そう言つてほほ笑む彼女は妖艶で、ものすごく美しかつた。幸せそうなその笑みに、雪も自然と笑顔を返した。

「ご注文、承りました」

雪が静かに頭を下げる。

「おいおい、ユキさん。店長に確認しなくていいんすか」

「うん。私が言えばお父さん、ダメとは言わないもの」

悪戯っ子のような笑みを浮かべて言つ雪に、海はかなわないな、呴いた。そんな二人を見て、三太と久楽々は笑みを交わす。

「じゃあ力いくん、十万円、本当にありがと」

おもむろに取り出した封筒を三太は海に渡した。それを見て海は慌てて久楽々を見る。

「こんなところに返してもいいんすか」

「ええ。この人、あつたことは全部話してくれたもの。我本当にあなたたちに感謝しているのよ。今まで仕事に没頭したらなかなか相手してくれなかつたサンタが、目の前に紅茶を置いたら一休みするようになつたの。我本当にびっくりして ケーキも食べてくれるようになつたし。私すごく幸せなのよ」

なんだか犬でもしつけているような言い方に、雪はくすりと笑つた。そんな雪を見て、久楽々は海の耳元に口を寄せた。

「カイくんもしつかりしないと、こんなにユキちゃんかわいいなら、誰かにとられちゃうかもしれないわよ」

「だからっ！…あんたがた一人はなんぞうおせつかい  
ええと、『忠告ありがとうございます』…」

怒鳴りかけた海を久楽々が冷ややかに見つめ、三太がその肩を押しどじめ、雪が不思議そうに見つめた。無理やり鎮められた海は面白くなさそうにそっぽを向いた。

「じゃあ詳しい話はあらためてしにくるわ。今日は一緒にデーター  
なの」

そう言つて久楽々は三太の腕に抱きついた。三太は嬉しそうに彼女の顔を見る。

海は大きく舌打ちしようとしながら、横で雪が小さく

「いいなあ」

と言つたのを聞き逃しはしなかつた。

「それじゃあ今日のところは失礼します。元気そうでよかつたよ。ウェディングケーキ、よろしくお願ひしますね」

三太が言つた。

「はい」

雪が頷く。

そして三太と久楽々は先ほど入ってきた扉の前へと立つた。雪と海は見送りに出る。扉を開いた外は道路が一面真っ白に染まっており、やわらかなぽたん雪が降る街は静かだった。久楽々は赤い傘を大きく広げ、それを三太に手渡した。三太はそれを掲げると雪達の方へ向き直つた。

「では、失礼します。また近いうちに来ますね」

「またね」

久楽々がほほ笑んだ。

「はい。またお会いしましょう

雪が小さく手を振る。海はポケットに手を突つ込むと、つっけんどんに言つた。

「勝手にお幸せに、つす」

それを見た久楽々はにやりと海に笑いかけた。

「カイくん、英語の間違いには注意ね。大事なところでミスつちやうと、大事な彼女逃すわよ。サンタはぎりぎり間に合つたみたいだけどね」

美しいその笑みに海は赤面した。見惚れたとかいうものではない。この女にも話しゃがつたのか、三太の野郎。しかも俺のミスに気付いてんじゃねえか。

苦々しげに顔を歪める海に、三太と久楽々が手を振つた。

「Berry Merry Christmas!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3052d/>

---

Berry Merry Christmas..

2010年12月16日03時08分発行